令和７年４月８日(火)陸奥新報（１面）

大手企業参集し研究

世界にはばたけ

弘前大学Ｊ－ＰＥＡＫＳ始動

国内最高水準の産学官民連携基盤

新たな価値生み出す

＝中＝

弘前大学ＣＯＩとＣＯＩ－ＮＥＸＴ（ＣＯＩネクスト）は、「短命返上」「地域活性化」「Ｗｅｌｌ－ｂｅｉｎｇ（心身、社会的に健やかで幸せな状態）」の同時実現に向け、戦略的かつ効果的なアプローチをしてきた。

強みとなったのが産学官民の連携だ。岩木健診のビッグデータを核にした同大中心の研究フィールドに国内の大手企業が競うように参集。これまでに24の共同研究講座を開設した。現在検討中の企業も多数あり、プロジェクトの規模はさらに拡大していく。

桂木招へい教授（中央）をはじめ、参画企業の研究者が弘前大に常駐。ビッグデータをベースに予防医療に焦点を当てた研究を進めている

参画企業の研究成果は疾病の予兆・予防法確立につながる新しいサービス、新製品に結び付いている。弘前大ＣＯＩ始動から間もない2015年に参画した花王（本社東京都）は、内臓脂肪と食事の研究に基づいて「スマート和食弁当」を提案、監修。この弁当は給食事業を展開する弘前市の栄研が事業化した。さらに、花王は青森銀行（現青森みちのく銀行）など県内企業の従業員を対象に、食生活を見直す「スマート和食プログラム」を実施し、参加者の内臓脂肪の低下や血圧改善に効果があることを実証している。

花王研究開発部門特命エキスパート兼弘前大Ｗｅｌｌ－ｂｅｉｎｇ社会実装本部長補佐の桂木能久招へい教授は「健康状態は千差万別。個別のニーズや課題に応じた提案、サービスの提供が企業への信頼につながっている」とした上で、「データサイエンスは後退することはない。岩木健診のビッグデータは人の体をよく知ることができる“宝の山”。さまざまな価値を生み出す可能性を秘めている」と強調する。

◆　◆

弘前大がＪ－ＰＥＡＫＳ（地域中核・特色ある研究大学強化促進事業）の戦略で掲げているのが、①研究強化②社会実装③人材育成－だ。

ＣＯＩネクストでは参画企業の研究者が大学に常駐。連携拠点の「健康未来イノベーションセンター」のオープンラボに集結し、ビッグデータ解析による新たな研究成果を挙げている。ここで構築された基盤が、国内最高水準の連携を実現する弘前大の特色になっている。

「参画企業にも多くのメリットがある」と桂木招へい教授。企業を引き付ける弘前大の魅力を「多数の企業が参集して共同研究する環境が研究者にとって知識と発想の源を豊かにする」とし、重ねて「産学官民の連携ネットワークが新たな価値を生み出し、社会を大きく変える研究につながっていく」と話す。

◆　◆

データが価値を生む経済のビジネスモデルが世界的に進む中で昨年、ＣＯＩネクストから初のベンチャー企業「メディカルデータインテリジェンス（ＭＤＩ）」が誕生。岩木健診の健康ビッグデータを基に開発された人工知能（ＡＩ）モデルの提供を開始した。ＡＩモデルは3年以内に糖尿病や軽度認知障害、動脈硬化など約20の疾病の発症確率を予測するもので、早期予防による生活習慣の改善を促進している。

これを活用し、少量のデータでも高精度に健康医療領域の因果関係を導き出すＡＩ技術を開発したのが富士通（本社神奈川県）だ。今年3月、健康課題の特定や対策に課題を抱える健康関連の法人向けに技術の提供を開始している。

ＭＤＩ取締役兼同大健康・医療データサイエンス研究センター長の玉田嘉紀教授は「富士通の技術をベースに新たな商品やサービスを生み出す会社が出てくれば、データの利用価値がさらに広がっていく」と期待を寄せる。

（稲葉智絵）